



シューベルト

Franz Schubert (1797-1828)

ヴァイオリンとピアノのための二重奏曲 イ長調 作品162 D 574

Duo Sonata for violin and piano
in A major Op.162 D 574

1	Allegro moderato	8:59
2	Scherzo. Presto	5:26
3	Andantino	4:38
4	Allegro vivace	5:32

アルペッジオーネとピアノのためのソナタ イ短調 D 821

Arpeggione Sonata in A minor D 821

5	Allegro moderato	11:51
6	Adagio	3:57
7	Allegretto	9:03

オレグ・クリサ (ヴァイオリン 1-4、8-10、ヴィオラ 5-7、11、12)

Oleh Krysa (violin, viola)

バリー・スナイダー (ピアノ)

Barry Snyder (piano)

2017年5月16-18日、2018年1月9-11日 神奈川・相模湖交流センターにて収録
Recording at Lake Sagami-ko Exchange Center, Kanagawa, 16-18 May 2017, 9-11 Jan. 2018

Producer: Tomoyoshi Ezaki, Recording Director & Engineer: Tomoyoshi Ezaki, Assistant Engineer: Masashi Minakawa,
A&R: Moe Sengoku, Photographer: Matt Wittmeyer, Cover Design: Shoko Okada
Special thanks to Chie Sawada

シューマン

Robert Schumann (1810-1856)

ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 第1番 イ短調 作品105

Violin Sonata No.1 in A minor Op.105

8	Mit leidenschaftlichem Ausdruck	8:06
9	Allegretto	4:15
10	Lebhaft	5:48

アダージョとアレグロ イ長調 作品70

Adagio and Allegro in A-flat major Op. 70

11	Adagio: Langsam, mit innigem Ausdruck	3:50
12	Allegro con brio: Rasch und feurig	4:53

TOTAL TIME 76:18

曲目解説

寺西 基之

シューベルト:ヴァイオリンとピアノのための 二重奏曲 イ長調 作品162 D 574

生涯ウィーンで活動したフランツ・ペーター・シューベルト(1797-1828)は、幼い時からヴァイオリンに親しんで家庭での演奏会でもこの楽器を弾くなど、ヴァイオリンに深くなじんでいた。彼が優れたヴァイオリン作品を幾つか残しているのも、この楽器に通じていたからだろう。このイ長調のソナタは1817年、すなわち20歳の時に書かれた作品。シューベルトは前年に3つの小規模なヴァイオリン・ソナタ(一般にソナチネとして知られている)を作曲していたが、このイ長調のソナタは構成的にも内容的にもいっそうの充実ぶりと創意を示しており、より本格的なソナタを追求しようとする彼の姿勢を窺わせている。とりわけ楽想の多彩さ、和声表現や転調の生み出すデリケートな表情の変化などに、シューベルトらしいロマン

的な魅力が発揮されており、さらにヴァイオリンとピアノの密な絡み合いにも綿密な工夫が図られている。なお出版は作曲家死後20年以上たった1851年によくはなされ、その際に“二重奏曲(デュオ)”というタイトルが付けられた。

4楽章構成。第1楽章(アレグロ・モデラート、イ長調、4分の4拍子)は歌心あふれる抒情的な楽想を連ねた美しいソナタ形式楽章。展開部は簡潔に作られている。第2楽章(スケルツォ、プレスト、ホ長調、4分の3拍子)は快活さと諧謔味を持ったスケルツォ。旋律的なトリオが対照される。第3楽章(アンダンティーノ、ハ長調、8分の3拍子)は簡素な主題をロンド的な形式のうちに変奏していく緩徐楽章。和声の変化や転調が生み出す微妙な表情が美しい。第4楽章(アレグロ・ヴィヴァーチェ、イ長調、4分の3拍子)は快活なソナタ形式。その第1主題は第2楽章のスケルツォ主題と関連しており、性格的にもスケルツォ的な特質を持ったフィナーレとなっている。

シューベルト:アルペジオオーネとピアノのためのソナタ イ短調 D 821

このソナタは題名のとおり、今日では廃れてしまったアルペジオオーネという楽器のためにシューベルトが作曲したものだった。この楽器はウィーンの楽器制作者ヨハン・ゲオルク・シュタウファーが1823年に作り出した弦楽器で、弦は6弦あり、チェロのように弓で演奏されたが、指板にはギターのようなフレットを持っていた。当初この楽器はかなり話題になったのか、教則本も出版され、いくつかの作品が書かれたほか、ヴァンツェンツ・シュスターという専門の演奏家も現われた。シューベルトもまさにこの楽器とその奏者シュスターのために1824年にこのソナタを書いたわけである。初演は同年暮れにシュスターのアルペジオオーネ、シューベルトのピアノで行なわれたようだ。その後、アルペジオオーネの人気はきわめて短期間で衰えてしまい楽器そのものもほとんど製造されなくなってしまったが、シューベルトのソナタは彼らしい叙情に満ちた名作ゆえに、主にチェロで代用されることで生き残り、そのおかげでアル

ペジオオーネという楽器の存在が伝えられることになったのだった。チェロのほか、当CDのようにヴィオラで演奏される機会も多く、またフルートその他の管楽器でも演奏されている。

3つの楽章からなる。第1楽章(アレグロ・モデラート、イ短調、4分の4拍子)はメランコリックな叙情を示す第1主題とリズムカルな動きの第2主題とからなるソナタ形式をとっている。第2楽章(アダージョ、ホ長調、4分の3拍子)はシューベルトらしいロマンティックなカンタービレ楽章。アルペジオオーネ(当CDではヴィオラ)のソロによる経過句を経て、そのまま続けられる第3楽章(アレグレット、イ長調、4分の2拍子)は親しげな主要主題のあいだに活発な動きの2つのエピソードが挟まれるロンドのフィナーレで、エピソードにはシューベルトが好んだいわゆるハンガリー風(ジプシー風)の性格が窺える。

シューマン:ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 第1番 イ短調 作品105

ドイツ・ロマン派を代表する作曲家ローベルト・

シューマン(1810—1856)は生涯に多くの室内楽作品を残したが、二重奏編成によるソナタは意外に少なく、3曲あるヴァイオリン・ソナタはいずれも後期になってからの所産である。そのうち第1番イ短調と第2番ニ短調は1851年に相次いで書かれている。シューマンがこの時期になってヴァイオリン・ソナタを手掛けたのは、ドイツの名ヴァイオリン奏者フェルディナント・ダーフィット[ダヴィット]の勧めがあったからだった。このCDに収められた第1番は、1851年の9月12日から16日までというわずか5日間のうちに作曲されたソナタで、後期のシューマンらしい渋い色調のうちに、暗く激しい内面感情と豊かな詩情とが織り合わされた味わい深い作品だ。もっともシューマン自身はこのソナタの出来栄に満足できず、引き続いて改めてダーフィットに献呈するためのソナタ第2番に着手するのだった。第1番の初演は1852年3月21日ライプツィヒにおいてダーフィットのヴァイオリン、クララ・シューマン(シューマン夫人)のピアノによってなされている。

3つの楽章からなっている。第1楽章(情熱

的な表現でもって、イ短調、8分の6拍子)はソナタ形式をとり、不安に駆られるような激しい動きのうちに、情熱と憂愁と憧憬のあいだを揺れ動いていく。第2楽章(アレグレット、ヘ長調、4分の2拍子)は気まぐれな変化に満ちたインテルメッツ風の中間楽章で、親密に語りかけるような主題を持つ主部に、短調の情熱的な2つのエピソードが挟まれる。第3楽章(生き生きと、イ短調、4分の2拍子)はふたたび落ち着いた動きに支配されたフィナーレで、ソナタ形式のうちに激しい感情的な起伏に満ちた展開を織り成す。終わり近くには第1楽章第1主題も回想され、作品全体を統一的に締めくくっている。

シューマン:アダージョとアレグロ 変イ長調 作品70

前述のヴァイオリン・ソナタ第1番が書かれた2年前の1849年に、シューマンはピアノと様々の楽器の組み合わせによる二重奏の小品をいくつも書いた。若い時期には感情の起伏の激しい作風を示したシューマンは、後期

になるにつれて内向的、内省的な傾向を強めていくが、そのことはこれらの小品やヴァイオリン・ソナタにはっきりと現われているといえよう。

この「アダージョとアレグロ」も1849年に作曲された一連の二重奏小品のひとつである。本来はホルンとピアノのために書かれた作品で、当時新しく用いられるようになったヴァルヴ・ホルンの特性を生かすように書かれたものである(因みに同じ年には、4つのホルンの伴奏を持つ男声合唱曲「狩の日誌」作品137や、4つのホルンと管弦楽のための「コンツェルトシュトゥック」作品86が書かれている)。題のとおり、アダージョ部分とアレグロ部分の2部構成の作品だが、2つの部分に主題的な関わりを持たせるなど、小品ながらも全体の統一が考慮されている点がシューマンらしい。彼自身、ホルンの代わりにチェロやヴァイオリンで演奏してもよいとしており、ヴィオラ、クラリネット、オーボエなどで演奏される機会も多い。当CDではヴィオラによって演奏されている。最初に置かれたアダージョ(遅く、内面的な表情をもって、変イ長調、4分の4拍子)ではロマン的な憧憬

に満ちた旋律が歌い紡がれる。続くアレグロ(急速に、そして燃えるように、変イ長調、4分の4拍子)は情熱的な音楽で、途中に瞑想的な中間部(アダージョ主題と関連する)を挟んで快活に運ばれる。

(てらにし・もとゆき)



オレグ・クリサ (ヴァイオリン、ヴィオラ)
Oleh Krysa (violin, viola)

ウクライナ出身のヴァイオリニスト。ダヴィッド・オイストラフの高弟。ヴィニアフスキ、チャイコフスキー、モントリオール国際音楽コンクール上位入賞を果たし、パガニーニ国際コンクールで優勝を飾る。29歳でキエフ音楽院学科長就任。グネーシン音楽院同ポジションを経て、モスクワ音楽院で15年間教鞭を執り、オイストラフのアシスタント教授も務めた。現在イーストマン音楽大学教授。2009年東京芸術大学招聘教授。

ソロリサイタルは、モスクワ音楽院大ホール、チャイコフスキー記念ホール、コンサートヘボウ、ウィグモア・ホール、スカラ座、カーネギー、ケネディセンター、サントリ等、世界中のメジャーなホールにて開催。

ソリストとして、ロジェストヴェンスキー、コンドラシン、キタエンコ、ラザレフ、フェドセーエフ、シレンコ、N.ヤルヴィ、ザンデルリング、デブリーストをはじめ多数の指揮者と、モスクワフィル、レニングラードフィル、ウクライナ国立交響楽団、BBC交響楽団、ロイヤル・ストックホルムフィル、ゲヴァントハウス管弦楽団、ワルシャワ国立フィル、チェコフィル、ワシントン・ナショナル交響楽団の他、世界各地のオーケストラと共演。

1977-87年、ベートーヴェン弦楽四重奏楽団の1st.ヴァイオリン奏者としても活躍した。

また現代の著名な作曲家——シュニトケ、グナイドーリナ、ペンデレツキ、シルベストロフ、スコリク、スタンコーヴィチらから厚く信頼され、彼らがクリサのために書き献呈した多くの作品を初演している。審査員、及び審査員長を務めた国際ヴァイオリンコンクールは、チャイコフスキー、ヴィエニャフスキ、パガニーニ、サラサーテ、パッハ、クライスラー、オイストラフ、クリサ、ソウル、仙台、モントリオールなど20以上にのぼる。

MELODIYA、BIS、TNC、OLYMPIA、OCTAVIAなど計11レーベルより55枚のCDがリリースされている。



バリー・スナイダー (ピアノ)
Barry Snyder (piano)

国際的著名なピアニスト、指導者であるバリー・スナイダーは、1966年ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールにおいて銀賞、アメリカユニオン賞、室内楽賞を同時受賞し世界デビュー。

彼のソロリサイタル、ジョイントリサイタル、マスタークラスはモスクワ、ブエノスアイレス、東京、バンコク、ロンドン、バルセロナ、NY、ワシントンD.C.、シアトル、ヴァンクーヴァーの各地にて開催された。R. ショー、L. ストコフスキー、D. ジンマン、C. デュトワ、S. アーリング、

A. フィードラーら指揮者とバルティモア、ワシントンD.C.、アトランタ、ヒューストン、モントリオール、ワルシャワ、シンガポール各地のオーケストラと競演。

室内楽奏者としての評価も高く、O. クリサ、Z. ザイトレン、M. クーペルマン、漆原朝子らと共演、CDレコーディング。「イーストマンTRIO」としてO. クリサらと共に長年にわたり活動。ソロ、室内楽、コンチェルトのCDを主要なレーベルから50枚以上リリースしている。

20-21世紀の現代音楽演奏にも意欲的に取り組み、世界初演を多く手がけた他、細川俊夫など、彼のために書かれた作品も数多く存在する。

1970年よりイーストマン音楽院ピアノ教授として教鞭を執り、「最も師事したいピアノ指導者」として名が挙げられている。

ソロを名高い指導者W. ホルマン、V. ソコロフ、C. ゲンハート、室内楽をJ. チェレンターノ、B. スミスに師事。

In Memory of Tatiana Tchekina

Tatiana Tchekina was my beloved wife and my musical partner. For 47 years, ever since we met as students at the Moscow Conservatory, we were together and did everything together. Tatiana and I traveled and performed in major concert halls around the world. We presented master classes together. We recorded 20 CDs together. We worked together at Eastman School of Music.

We planned to record a CD with works by Shubert and Schumann, but on December 7, 2013, my life completely changed. With Tatiana's tragic death in a car crash, I lost my partner in life and in music. Once she said: "Play Violin". On this CD I'm playing with my great colleague, Professor Barry Snyder, whom Tatiana admired very much.

She continues to be with me in my heart. Her spirit is everywhere.

Oleh Krysa

タチアナ・チェキナを偲んで

タチアナ・チェキナは私の最愛の妻であり、また音楽上のパートナーでもありました。モスクワ音楽院の学生として出会い、47年もの間すべてを共にして来たのです。また、タチアナと私は世界の幾多のホールで演奏も重ねてきました。マスタークラスを共にし、20枚ものCDも録音しました。私たちはイーストマン音楽学校でも、共に教鞭を取ってきたのです。

一緒にシューベルトとシューマンの作品を録音する予定でしたが、2013年12月7日私の人生は反転してしまうのです。タチアナの交通事故による悲劇的な死により、私は人生と音楽のパートナーを同時に失ってしまうことになってしまいました。かつて彼女は「ヴァイオリンを弾き続けなさい」と私に言いました。そうして今回のCDでは、タチアナも称賛していた私のすばらしい仲間であるバリー・スナイダー教授と一緒に演奏しています。

彼女は私のこころの中に今も生き続けています。その気高い精神と共に。

オレグ・クリサ



●  and DSD are Trademarks.

●DSDの音はSACD対応プレーヤーでお楽しみください。尚、本品はCDレイヤーをあわせ持った二層構造の「ハイブリット・ディスク」になっておりますので、通常のCDプレーヤーの多くのものでもCD品質の音でお楽しみいただくことができます。また、DVDプレーヤーの場合は、CD対応となっている機種でもかからないものがありますので、あらかじめ御了承ください。詳しい再生上の取り扱い方については、ご使用になるプレーヤーなどの取り扱い説明書をご覧ください。

<取り扱い上のご注意>●ディスクは画面共、指紋、汚れ、キズ等をつけないように取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取ってください。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは画面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。●保管上のご注意●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ご使用後、ディスクは必ずプレーヤーから取り出し、専用ケースに入れて保管して下さい。●ディスクケースの上に重い物を置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

このCDを、権利者の許諾なく貸貸業に使用すること、ネットワーク等を通じてこのCDに収録された音を送信できる状態にすることを禁じます。また、個人的に楽しむなどの場合を除き、著作権法上、無断複製は禁じられています。